

## ■ 書 評 ■

筒井美紀 [著]

## 『高卒労働市場の変貌と高校進路指導・就職斡旋における構造と認識の不一致』

名古屋大学 寺田 盛紀

本書は、「認識社会学」アプローチの構築を目指す気鋭の教育社会学研究者である筒井美紀氏が東京大学に提出したほぼ同名の博士学位論文をもとにしたものである。

1970年代末以降、EC（現在のEU）やOECDの加盟諸国において、「学校から就業生活への移行」過程に関する研究が精力的に進められてきた。とくに、1996年にOECD教育委員会が加盟諸国に対してその問題実態に関するレビュー（調査研究）を求めて以降、それは著しい。我が国においても、周知のように天野、荻谷、小杉、吉本、本田などによって、とくに高卒就職のプロセスに関わる実証的研究が蓄積されてきた。

第1章（序論）で、著者はまず、高卒者の就業への移行過程や労働需給関係について、とくに我が国における上記のような先行研究の方法論の欠陥と、そしてそのことがこの問題の複雑性を見えにくくしていることの問題を指摘する。従来の研究の方法的不十分さとは、1つはそれが労働需要側の視点からのみ分析してきたこと（労働供給側の分析の必要性）であり、さらにもう1つは構造機能主義的な「制度的リンケージ・モデル」に偏向していたこと（認識論的アプローチの必要性）である。本書の枠組みとして、

高卒者の「認知的スキルの習熟」あるいはその中心的要素たる「OJTを可能にする知的要素」の形成という視点と、労働需要側の高卒者に対する見極め（認識）と高校進路担当者の労働需要認識の聞き取りという手法が提示される。

第2章（『積極的進路保障』はなぜ困難なのか？）ではまず既存の各種統計資料を「企業規模」に着目して読み替え、従来の高卒労働市場の「閉鎖化仮説」「高学歴代替仮説」の再考を迫る。分析の結果、高学歴代替は大企業に当てはまったとしても中小企業ではそうではないこと、非正規雇用化も中小企業の男子では急激なものではないこと、中小企業ではむしろ25-34歳男子による代替が進行していることを明らかにしている。

第3章（「新規労働供給の変容と中小企業における新規高卒技能工の配置と分業範囲」）では、「高学歴代替」にかかわって、労働経済学者である野村正實の「柔軟であいあまいな分業」「明確で固定的な分業」という分析概念が批判的に検討され、技能工の職務高度化（下位職務から上位職務への「勾配」）に対応した中小企業における学歴別分業状況が「達成までの要求時間」と「職務の難易度」の観点から分析される。同氏が所属した研究室関係の20年前（1982年）のインタ

ビュー調査と自身のインタビュー調査（高卒者の職務高度化可能性の程度が異なる3つの中小企業の比較）をもとにして、中小企業においてこそブルーカラーの「高学歴代替」, 「キャリア・ルートの急勾配化」, 「それに答えられない新規高卒者の存在」(「OJTを可能にする知的要素」の不足)が顕著であること、専門高校卒者を中心とする高卒技能工の受け皿問題の深刻さを解明している。

第4章(「労働需給構造の教師による認識と進路指導・就職斡旋におけるリアクション」)はいわば筆者の方法的特質がもっと明確に展開される部分であり、高卒就職における「閉鎖化」や「実績関係」をめぐる「構造と認識の不一致」状況が、3年間にわたる12校の進路担当教師へのインタビュー調査をもとに分析・解釈される。分析によると、就職指導担当教師は第3章で解明された深刻さにもかかわらず、労働需要の変化を単に「狭隘化・玉石混交化」ととらえ、「実績企業」にこそ生徒の将来的職務高度化可能性や「専門教育レリバンス」が存在していると信じ込んでいると言う。

第5章の「結論」では本書のまとめが行われるとともに、上記のような高卒就職の難しさを乗り越えるべく、「積極的進路保障」のための認知的スキルや社会的職業情報の重要性などが指摘される。

本書は、師匠である苅谷氏などこれま

での研究とは違った方法にもとづき、高卒就職や移行問題にアプローチし、その結果とくに第4章で示されたような新たな知見を提供するなど、たいへん優れた、読み応えのある著作である。そのように高く評価したい。また、今後の研究により、筆者がいう「認識社会学」的方法の構築にも期待を持たせるインパクトも併せ持っている。

若干の注文的コメントをしておきたい。1つは、キーワードである「OJTを可能にする知的要素」「認知的スキル」の実質がよく描かれず、実践的能力や専門的能力などとの関わりが不明であったことである。とくに、専門高校生の就職問題や移行問題を描こうとするなら、そのことは必要である。第2に、認知的スキル形成が決定的であかどいかは、高卒者のキャリア形成における(「時間的奥行き」を配慮した)、訓練と内容に即した分析が必要ではないか。第3に、第5章(結論)はあまりほめられるものではない。「理論的インプリケーション」で再び討論が起こされたり、また本書の分析の課題ではないはずの進路指導・キャリア教育の問題が評論されたりしていることである。

第1および第2の論点に関しては、評者も著者とともに取り組みたいと思う。

◆A5判 230頁 本体5,333円  
東洋館出版社 2006年2月刊